

宣教師夫人の音楽活動：
フロレンス・アイグルハートの場合

津 上 智 実

Musical Activities of a Missionary Wife, in the case of Florence Iglehart

TSUGAMI Motomi

Abstract

The purpose of this paper is to clarify musical activities of a missionary wife in the case of Florence Stratton Iglehart (1884–1958). From articles in *The Japan Times*, it is read that Florence was active as a talented musician from time to time, while raising three daughters and devoting herself to social welfare projects, as Mrs. Charles Wheeler Iglehart, a wife of a missionary of the Methodist Episcopal Church.

As a singer, in addition to singing in choruses and vocal ensembles as Tokyo Choral Society or Tokyo Madrigal Club, she came into the spotlight as the soprano soloist of Handel's Oratorio *Messiah* in December 1930, Brahms' *Requiem* in March 1931, and Bach's *Christmas Oratorio* in December 1931, in the latter two, in each two performances in Tokyo and Yokohama.

As a conductor, she conducted two performances of Mendelssohn's Oratorio *Elijah* in April 1916, and a one-month pre-rehearsal for the performance of Handel's *Messiah* in Karuizawa in the summer of 1927, to both of which special acknowledgments to her conducting were noted. She also conducted the American School choir in the 1930s, and choirs at the Tokyo Union Church at Thanksgiving service in 1940, Christmas services in 1950 and 1951, and Easter service in 1952.

In 1935, she was elected president of the Tokyo Women's Club and then interviewed about her childhood education. She was home-educated only in Japan before entering Simmons College and then New England Conservatory in America, but as being the second daughter of George Allchin, a missionary in Osaka known as the "father of church music in Japan", she must have spent a musically rich life in her home.

In 1953, Mr. and Mrs. C. W. Iglehart were both awarded decorations for their contributions to Japanese society and education, and it shows her distinguished presence as a missionary wife.

Keywords: missionary wife, choir conductor, Iglehart, Allchin, *Messiah*

要 旨

本稿の目的は、宣教師夫人の音楽活動をフロレンス・アイグルハート（1884～1958）の事例に即して明らかにすることである。フロレンスはメソジスト監督派教会宣教師チャールス・W. アイグルハート夫人として3人の娘を産み育て、社会事業に尽力しながら、折々に音楽家として活躍したことが『ジャパン・タイムズ』掲載記事から読み取られる。

歌い手としては、合唱や重唱の他、1930年12月のヘンデル《メサイア》に加えて、1931年3月のブラームス《レクイエム》と1931年12月のバッハ《クリスマス・オラトリオ》の各2公演でソプラノ独唱者を務めた。

指揮者としては、1916年4月にメンデルスゾーン《エリヤ》抜粋を東京と横浜の2公演で指揮し、1927年夏の軽井沢での《メサイア》公演では一ヶ月の事前リハーサルを指揮して、いずれもその貢献が特記された。1930年代にはアメリカン・スクールの合唱団を指揮し、東京ユニオン教会では1940年の感謝祭礼拝、1950年と翌年のクリスマス礼拝、1952年の復活祭礼拝で合唱を指揮している。

社会・教育事業への貢献により1953年に夫妻揃って叙勲されており、宣教師夫人として際立った存在であったことが知られる。

キーワード：宣教師夫人、合唱指揮者、アイグルハート、オルチン、メサイア

1. 目的

本稿の目的は、宣教師夫人の音楽活動を、フロレンス・ストラットン・アイグルハート Florence Stratton Iglehart (1884~1958) の事例に即して明らかにすることである。フロレンスは1911年にメソジスト監督派教会宣教師のチャールス・ホイラー・アイグルハート Charles Wheeler Iglehart (1882~1969) と結婚して、アイグルハート夫人となり、夫の赴任に従って、仙台、東京、弘前、アメリカ等に次々と居を移しながらも、折々に目覚ましい音楽活動を実践したことで注目される女性である (津上 2022b, 103)。

従来、「宣教師夫人の女性海外伝道運動への貢献は、女性宣教師の派遣を本国アメリカに要請し、それを実現させた点」にあったとされ、「女性海外伝道運動の協力者としての宣教師夫人の働き」については「これまでほとんど論じられなかった」とされる (齋藤 2009a, 86)。齋藤の研究は、多忙な「女性宣教師に代わって、異教地に関する知識や情報を積極的に発信していた宣教師夫人の姿」を機関誌『異教女性の友 *Heathen Woman's Friend*』¹ の掲載記事から浮かび上がらせたものであり、ほとんど唯一の先行研究と言うべきものであるが、音楽は論じていない。

宣教師に関する記録が組織的に残されているのに対して、宣教師夫人に関する記録は付随的・偶発的に残っているだけであり、これを掬い上げる手段は限られている。本稿では英字新聞『ジャパン・タイムズ *The Japan Times*』の掲載記事から、宣教師夫人フロレンスの活動を可能な限り浮き彫りにすることを試みる。

当時の慣習として、既婚婦人は夫の名前で呼ばれる。すなわち「チャールス・ホイラー・アイグルハート夫人」ないしは「チャールス・アイグルハート夫人」、より簡略には「アイグルハート夫人」と呼ばれて、ファースト・ネームの「フロレンス」が表記されることはない。

1 機関誌『異教女性の友 *Heathen Woman's Friend*』は1869年創刊、1896年に『女性宣教師の友 *Woman's Missionary Friend*』に誌名変更して、1940年8月終刊。

アイグルハート夫人としてのフロレンスの活動を洗い出す上で留意すべき点として、同時代にもう一人のアイグルハート夫人が同じ活動圏に存在したことがある。すなわち、フロレンスの夫チャールスには4歳年上の兄があり、この兄エドウィン・テイラー・アイグルハート Edwin Taylor Iglehart (1878~1964) もメソジスト監督派教会宣教師として青山学院等で長く教鞭をとったが、その夫人ルエラ Luella Iglehart (1881~1966) も音楽教師としての経歴を持ち、同様にアイグルハート夫人と呼ばれた。フロレンスが「C. W. アイグルハート夫人」、ルエラが「E. T. アイグルハート夫人」と明記されている場合は問題ないが、単に「アイグルハート夫人」と書かれる場合も多く、その場合には前後の文脈等からどちらの「アイグルハート夫人」かを判断する必要がある²。この点に留意しながら、以下の手順で論を進める。

まず、次節で事典類での扱いと略歴とを確認した上で、英字新聞『ジャパン・タイムズ』掲載記事によりながら、第3節で女性としての活動を、第4節で歌い手としての演奏活動を、第5節で指揮者としての活動を論じる。その際、軽井沢や野尻湖といった避暑地における音楽活動については別立ての第6節で扱う。第7節では後年の音楽活動を可能にした幼年時代の教育について、本人の回顧を手掛かりに考察する。第8節で叙勲に触れ、第9節で総括を試みる。

2. 略歴

まず、事典類での扱いを確認しておこう。

『来日西洋人名事典 増補改訂』（日外アソシエーツ、1995）では上記4人の内、エドウィン・アイグルハートのみが立項されて、その末尾で夫人の略歴にも触れているが、ルエラという個人名は挙げられていない。あくまで「アイグルハート夫人」としての扱いである（武内 1995、1）。

『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988）ではチャールス・アイグルハー

2 恩賜休暇でアメリカ滞在中の不在時に関する報道等から、ルエラはピアノ演奏が専門で人前での独唱は基本的に行わないこと、一方、フロレンスは歌唱ないし指揮が専門であって鍵盤楽器の演奏で舞台に立つことは基本的にないことが判明する。

トとエドウィン・アイグルハートは立項されているが（日本キリスト教歴史大事典編集委員会 1988、10）、フロレンスとルエラは立項されていない。

一方、『来日メソジスト宣教師事典』（教文館、1996）では、チャールスやエドウィンはもちろんのこと、フロレンスやルエラも立項されている（クランメル 1996、128～129）。

『来日メソジスト宣教師事典』のフロレンスの項（クランメル 1996、128～129）は次のように伝える。

Iglehart [アイグルハート], Florence Stratton (Mrs. C. W.)

b. 1884. 03. 26, Osaka; child of George Allchin & Nellie (Stratton) A.; d. 1958. 05. 21, New York, NY, heart attack; int. Kensico Cemetery, Westchester County, NY; B. A., Simmons Col., Boston, MA; mar. 1911. 04. 06, Kyoto, Charles Wheeler Iglehart; MEC; BFM; ar. 1911. 04. 06; 1911-13 Sendai; 1913-16 Tokyo; 1916-17 in U.S.A.; 1917-21 Sendai; 1921-30 Hiroaki; 1930-41 Tokyo; 1941-46³ in U.S.A.; 1946-53 Tokyo; dptd. 1953. 06.

組合教会在日宣教師の娘。再来日前にボストンのニュー・イングランド音楽院に学び、1909年から1911年まで同志社女学校でアメリカン・ボード（ABCFM）の宣教師を務める。社会事業に尽力、東京の興望館コミュニティ・センター所長となる。1953年に勲五等瑞宝章を受ける。子供は、ヘレン（スチュアート・リリコ夫人）；マリオン D.（チャールズ・ランドルフ・リチャードソン夫人）；エリザベス（ケネス・フット夫人）⁴。

3 戦後、アイグルハート夫人フロレンスが日本に戻ったのは1950年9月のことであり、『来日メソジスト宣教師事典』の記述は「1941-50 in U.S.A.; 1950-53 Tokyo」と改めるべきと思われる。後述の叙勲の功績調書もこの見解を支持する。

4 Helen (Mrs. Stuart Lillico); Marion D. (Mrs. Charles Randolph Richardson); Elizabeth (Mrs. Kenneth Foote).

同書のルエラの項（129）には次のようにある。

Iglehart [アイグルハート], Luella (Mrs. E. T., Sr.)

b. 1881. 09. 05, Katonah, NY; child of Lewis Henry Miller & Margaret (Barclay) M.; d. 1966. 02. 06, Katonah, NY, pneumonia; int. Kensico Cemetery, Westchester County, NY; mar. 1907. 08. 06, Katonah, NY, Edwin Taylor Iglehart; MEC; BFM; ar. 1907. 09. 28; 1907-9 Tokyo; 1909-12 Hirosaki; 1912-38 Tokyo; dptd. 1938. 04. 01.

結婚前は音楽教師。子供は、フェルデナンド C.; マーガレット; ナニー; ネットイー; ジュリア (ジョン・マーデン夫人); エドウィン・テイラー Jr.; ルエラ; レイス M.; チャールズ・ステュアート。

このように「生没年と両親、死因と埋葬地、結婚と夫の氏名、滞在地と滞在期間、子どもの名前」が宣教師夫人として記述されるべき基本事項であり、本人については「結婚前は音楽教師」といった形で短く記載されるのみである。フロレンスの項で本人に関する記述が3行余りあるのは例外的と言ってよい。

今後の議論の土台として、以下に「表1）フロレンス・アイグルハート略年表」を掲げる。これは上記の事典の記載内容と『ジャパン・タイムズ』紙による報道、さらに叙勲の功績調書（後述）の記載内容とを参考に作成したものである。

表1）フロレンス・アイグルハート略年表

年月日	事項
1884-3-26	大阪市川口町で生まれる
1906	シモンズ大学卒業
1909	ニュー・イングランド音楽院を卒業

1909～1911	ABCFM 宣教師、同志社女学校の音楽教師を務める
1911-4-6	チャールス・ホイラー・アイグルハートと結婚
1911～1913	仙台在住（夫の赴任先）
1912-2	長女ヘレン誕生
1912-7-12	葬儀礼拝（於：青山学院礼拝堂）で合唱 8 人中の一人として歌唱
1913～1916	東京在住（夫が教文館支配人）
1913-6-1	青山学院の新院長就任式で独唱
1913-9-10	軽井沢の最終演奏会（於：ユニオン教会講堂）で独唱 2 番（6）（16*）
1914-2-10	青山学院文学会（於：青山学院礼拝堂）で独唱
1914-10-6	次女マリオン誕生
1915-6-20	連合国バザー & コンサート（Sankaido）で歌唱
1915-10-30	ベルギー救済基金の慈善演奏会（於：帝国ホテル）にて四重唱で 'The Maiden of the Fleur-de-Lys' と 'You stole my Love' を歌唱
1915-11-1	東京ミュージカル協会で独唱：Galloway: 'The Gipsy Trail', Nevin: 'Twas April'
1915-12-18	東京ウィメンズ・クラブ会合（於：神田 YWCA）で独唱、(1) Chadwick: 'Allah', 'Before the Dawn', (9*) Salter: 'The Cry of Rachel'
1916-4-10	本郷中央会堂でメンデルスゾーン《エリヤ》を指揮
1916-4-23	東京ユニオン教会の復活祭礼拝で独唱、Shelley 作 'Resurrection'
1916-4-24	横浜ユニオン教会でメンデルスゾーン《エリヤ》を指揮
1916-4-27	アジア号で出航して渡米
1916～1917	アメリカ滞在
1917～1921	仙台在住
1919	興望館セトルメント創立、理事就任
1920頃	三女エリザベス誕生
1921～1930	弘前在住
1921	弘前市東奥義塾音楽担当教師となる

* = コンサート最終演目での出演

1922	軽井沢に到着してコテッジ453番に
1927-7-30	軽井沢の《メサイア》事前リハーサルヶ月を指揮
1929-7-24	弘前から野尻湖へ、野尻湖のコテッジ21番
1929-8-16	野外演奏会で独唱、(8*) Dickson 作 ‘Thanks be to God’ と Terry 作 ‘The answer’
1930-2-21	東京ユニオン教会の音楽委員会委員に選ばれる
1930～1941	東京在住
1930-4-1	東京で宣教師活動
1930-4-15	ゲーリー宅の歓迎会で独唱
1930-6-26	追悼式で夫妻で四重唱を演奏
1930-9-3	野尻湖から東京へ、四谷中町6の新居へ
	アメリカン・スクールの音楽非常勤講師を務める
1930-9-23	歓迎会で《エリヤ》の四重唱 ‘O come everyone that thirsteth’ を演奏
1930-11-15	アメリカン・スクールの見学客（日本人の音楽教師）を前に独唱
1930-12-10, 11	神田 YWCA のヘンデル《メサイア》でソプラノ独唱
1930-12-13	クリスマス・ページェント（日本青年館）でダブル・カルテットの指揮
1930-12-19	女性補助員のクリスマス昼食会後に ‘O come Let us Adore Him’ を独唱
1930-12-23	東京マドリガル・クラブのクリスマス演奏会（於：日本青年館）に出演
1930-12-24	東京ユニオン教会の特別礼拝で ‘O Jerusalem, look about thee’ by Dudley Buck を独唱
1931-2-25	アメリカン・スクール演奏会で高校合唱を指揮 ‘The Little Tin Soldier’ by Holly, ‘Nobody knows the Trouble I’ve Seen’（黒人霊歌）
1931-3-22	日本人道協会の慈善演奏会に東京マドリガル・クラブの一員としてメゾで出演、歌い手12人
1931-3-28	神田 YWCA でのブラームス《レクイエム》でソリスト
1931-3-30	横浜のフェリス女学院講堂でのブラームス《レクイエム》でソリスト
1931-6-18	アメリカン・スクール卒業式で合唱を指揮

1931-8-4	野尻湖で G. オルチン師とヘレン・オルチンをもてなす
1931-12-9	10時から自宅で東京家庭問題クラブの会合
1931-12-10	横浜のフェリス女学院講堂でバッハ《クリスマス・オラトリオ》ソリスト
1931-12-12	東京の中央会堂でバッハ《クリスマス・オラトリオ》のソリスト
1932-1-22	オルチン師が秩父丸で横浜出航するのを見送る
1934-9-18	夫妻がサンフランシスコ発の秩父丸で横浜帰着
1935-2-11	東京ウィメンズ・クラブ次期会長に選出、興望館セトルメント理事長に就任
1935-6-29	長女の結婚式で上海訪問、7月3日帰日して野尻湖へ
1936-4-9	結婚25周年のサプライズ・パーティー
1937-4-14	東京ウィメンズ・クラブ会長退任パーティー
1937-8-5	比叡丸で娘と渡米
1937-11-19	竜田丸で帰日
1938-1-5	野尻湖で数日の休暇を過ごして帰京
1938-8-28	野尻湖恒例の宗教的演奏会でゴール《聖なる都》を指揮
1939-9-5	夏を野尻湖で、この週末を日光で過ごして帰京
1939-11-2	上海訪問から帰日
	リトル・クラブのクリスマス・ミュージカルの相談を自宅で
1940-11-21	感謝祭礼拝で8声の合唱‘Now Thank We All, Our God’を指揮
1941-1-26	リトル・クラブの会合を自宅で
1941-4-24	リトル・クラブが送別会
1941-4-26	太平洋戦争のため現職を辞して帰米
1941～1950	アメリカ在住
	日本人救済委員会委員長、在米興望館賛助会委員長に就任
1941-8-12	野尻湖の夫妻のコテージ87番は友人家族が借用
1950-9-13	再び来日して興望館理事に就任
1950～1953	東京在住

1950-12-24	東京ユニオン教会クリスマス礼拝で合唱指揮
1951-12-23	東京ユニオン教会クリスマス礼拝で合唱指揮
1952-4-12	東京ユニオン教会復活祭礼拝で合唱指揮
1952-4-25	東京ユニオン教会女性部の裁縫集会を自宅で開催
1953-7-12	勲五等瑞宝章、叙勲を受ける
1953-7-13	横浜港からプレジデント・ボーク号で帰米
1958-5-21	ニューヨークにて心臓発作で死去、享年74歳

3. 女性としての活動

まず、女性として、宣教師夫人としての働きを見ておこう。フロレンスは3人の娘を産み育て、夫の海外出張の見送りや出迎え、軽井沢の宣教師会議に同行するといった役割を果たしている。さらに来客や会合の世話をし、離任する宣教師の送別会や新任者の歓迎会を自宅で開き、ディナーやランチョンを準備してもてなしている。教会の婦人部の世話役、娘の大学入学や結婚の世話、救済献金への協力なども行なっている。

具体的には、「ベルギーの未亡人と孤児のための救済基金委員会 committee of the Fund for the Relief and Rehabilitation of the widows and orphans of Belgium」で副委員長に選出されたり（1915-11-12 JT⁵）、仙台の孤児のためのバザー（1921年6月）でメソジスト監督派教会女性部委員長として洋風料理を提供する任務を担って、会期中、最も賑わったコーナーを実現したりしている（1921-6-21 JT）。子どもたちが通うアメリカン・スクールで講演の記録係を務めたほか（1931-4-19 JT）、東京家庭問題クラブ（Tokyo Home Problem Club）の会合を自宅で度々開いている⁶。東京ユニオン教会（Tokyo Union Church）

5 JTは『ジャパン・タイムズ *The Japan Times*』の略で、先立つ数字は記事の掲載年月日を示す。

6 東京家庭問題クラブの会合を自宅で開いた報道は、1931年12月（1931-12-9 JT）、1935年2月（1935-2-12 JT）と3月（1935-3-12 JT）に見られる。

の夕食会の食事担当委員を務めたり（1935-1-31 JT）、アメリカからの視察団 27名にディナーを提供したりもしている（1935-5-8 JT）。

戦後の再来日後にも、東京ユニオン教会女性部の裁縫集会（sewing meeting）を自宅で開催し、「自分の裁縫道具入れ（work basket）を持参のこと」と呼びかけている（1952-4-25 JT）。

このような女性としての活動、宣教師夫人としての活動に加えて、フロレンスは折々に音楽家として演奏活動を行なっている。その演奏活動を次節以下で追ってみよう。

4. 演奏活動（1）歌い手として

フロレンスの演奏活動の内、歌い手としての活動をまとめたものを表2として掲げる。

表2）演奏活動（1）歌い手として

年月日	事項
1912-7-12	青山学院礼拝堂の葬儀礼拝で合唱 8 人中の一人として歌唱
1913-6-1	青山学院の新院長就任式で独唱
1913-9-10	軽井沢の最終演奏会（於：ユニオン教会講堂）で独唱 2 番（6）（16*）
1914-2-10	青山学院文学会（於：青山学院礼拝堂）で独唱
1915-6-20	連合国バザー & コンサート（Sankaido）で歌唱
1915-10-30	ベルギー救済基金の慈善演奏会（於：帝国ホテル）にてグリーの四重唱（Mrs. C. Iglehart, Mr. Purvis, Mr. Iglehart, Mr. C. Iglehart）で ‘The Maiden of the Fleur-de-Lys’ と ‘You stole my Love’ を歌唱
1915-11-1	東京ミュージカル協会で Galloway: ‘The Gipsy Trail’, Nevin: ‘Twas April’ を独唱
1915-12-18	東京ウィメンズ・クラブ会合（於：神田 YWCA）で独唱、(1) Chadwick: ‘Allah’, ‘Before the Dawn’, (9*) Salter: ‘The Cry of Rachel’
1916-4-23	東京ユニオン教会の復活祭礼拝で独唱、Shelley 作 ‘Resurrection’

1927-12	弘前の夫妻宅にシャイブリー夫妻が滞在し、秋田県と青森県で一連の演奏会を行う
1929-8-16	野外演奏会（於：コテッジ 13 番前の湖畔）で独唱、(8*) Dickson: 'Thanks be to God' と Terry: 'The answer'
1930-4-15	ゲーリー宅の歓迎会で複数曲を独唱
1930-6-26	追悼式で夫妻で四重唱を演奏
1930-9-23	歓迎会で CW 夫と ET 夫妻を含む四重唱で《エリヤ》から 'O come everyone that thirsteth' を演奏
1930-11-15	アメリカン・スクールの見学客（日本人の音楽教師）を前に独唱
1930-12-18	神田 YWCA の《メサイア》でソプラノ独唱
1930-12-19	女性補助員のクリスマス昼食会の後に 'O come Let us Adore Him' を ET 夫人のピアノと Mrs. L. D. Sturgeon のヴァイオリン伴奏で独唱
1930-12-23	東京マドリガル・クラブのクリスマス演奏会（於：日本青年館）に出演
1930-12-24	東京ユニオン教会の特別礼拝で独唱 'O Jerusalem, look about thee' by Dudley Buck
1931-3-22	日本人道協会の慈善演奏会に東京マドリガル・クラブの一員としてメゾで出演、歌い手12人
1931-3-28	神田 YMCA でのブラームス《レクイエム》でソリスト
1931-3-30	横浜のフェリス女学院講堂でのブラームス《レクイエム》でソリスト
1931-12-10	横浜のフェリス女学院講堂でのバッハ《クリスマス・オラトリオ》でソリスト
1931-12-12	東京の本郷中央会堂でバッハ《クリスマス・オラトリオ》のソリスト

* = コンサート最終演目での出演

表 2 を見ると分かるように、フロレンスは1912年から1931年までほぼ足掛け20年間にわたって多様な場で歌唱を行なっている。夫の勤め先であった青山学院や教会での礼拝や儀式、会合等で独唱や重唱を行なっているほか、都内および横浜の大きなステージでも歌っている。当時の主要会場であった帝国ホテル演芸場や神田の YWCA 会館ホール、本郷の中央会堂、日本青年館等である。

合唱メンバーとしては、1925年6月14日にフレッド・ダニエル・ゲーリー Fred Daniel Gealy (1894~1976) 指揮の東京コーラル・ソサエティ Tokyo Choral Society がシャルル・グノー Charles Gounod (1818~1893) 作曲のモテット《ガリヤ Gallia》とテオドール・デュボア Theodore Dubois (1837~1924) 作曲のオラトリオ《キリストの最後の7つの言葉 The Seven Last Words of Christ》の2曲を上演（於：アメリカン・コミュニティ・ハウス）した際、合唱のソプラノ・パートを歌っている（津上 2022b, 102）。

重唱メンバーとしては、東京マドリガル・クラブ Tokyo Madrigal Club という名称の声楽アンサンブルに属して、1930年12月23日の同団のクリスマス演奏会（於：日本青年館）（1930-12-23 JT）や1931年3月22日の日本人道協会 Japan Humane Society の慈善演奏会に出演して歌っている（1931-3-22 JT）。

中でも特筆されるのは、1930年代の宗教的オラトリオの公演でソプラノのソリストを次々と務めたことである。フロレンスは、夫チャールスと共に仙台で4年（1917~1921）、弘前で10年（1921~1930）を過ごして13年振りに東京に戻ってきた。1930年春のことである。それを待ち構えていたかのように、次々と大役を与えられている。

舞台での活躍に先立って、1930年2月に東京ユニオン教会の音楽委員会委員に指名された。同委員会の委員長を務めるゲーリーは、アイグルハート夫妻が4月1日に東京に赴任すると、自宅で歓迎会を開いて夫妻をもてなしており、その際にフロレンスが返礼として数曲を独唱している（1930-4-15 JT）。

舞台でのソリストとしては、まず1930年12月18日、ゲーリーの指揮する東京コミュニティ・オラトリオ・ソサエティ Tokyo Community Oratorio Society の第7回演奏会（於：神田YWCA 会館ホール）において、ゲオルク・F. ヘンデル Georg Friedrich Handel (1685~1758) 作曲のオラトリオ《メサイア Messiah》のソプラノ独唱者を務めている⁷（1930-11-22 JT）。

7 指揮はゲーリー、アルト独唱はレナ・ドエルティ Lena Daugherty、テノール独唱はグラハム・バター Graham Batter、バス独唱はマッケンレー J. R. McKenlay であった。

翌1931年3月に同団がヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833～1897) 作曲の《[ドイツ・] レクイエム Requiem》を上演した際、3月28日の東京公演（於：神田 YWCA 会館ホール）と同月30日の横浜公演（於：フェリス女学院講堂）のいずれにおいても、フロレンスがソプラノ独唱を務めた⁸（1931-3-25 JT）。

さらに同年12月にゲーリー指揮の東京コーラル・ソサエティがヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685～1750) 作曲《クリスマス・オラトリオ Christmas Oratorio》を2回上演（12月10日は横浜のフェリス女学院講堂、12月12日は本郷中央会堂）した際にもソプラノ独唱を担っている（1931-12-6 JT）。

このように1930年12月のヘンデル《メサイア》、1931年3月のブラームス《レクイエム》、1931年12月のバッハ《クリスマス・オラトリオ》（後2者はいずれも横浜と東京の2公演）と立て続けに大曲のソリストを任されており、指揮者ゲーリーの信頼が厚かったことが窺われる。いずれの楽曲においても、ソリストには高い技量と深い精神性が求められる。それを兼ね備えていた歌い手であったと推察される。

5. 演奏活動（2）指揮者として

フロレンスの演奏活動の内、指揮者としての活動をまとめたものを表3として掲げる。

表3）演奏活動（2）指揮者として

年月日	事項
1916-4-10	本郷中央会堂でメンデルスゾーン《エリヤ》を指揮

8 指揮はゲーリー、ピアノ伴奏はフォーチュット夫人 Mrs. L. W. Faucett、バリトン独唱はマッケンレーで、収益は興望館のピアノ基金と東京ユニオン教会のオルガン基金とに捧げられた（1931-3-30 JT）。

1916-4-24	メンデルスゾーン《エリヤ》を横浜ユニオン教会で指揮
1927-7-30	軽井沢のヘンデル《メサイア》事前リハーサル一ヶ月を指揮
1930-12-13	日本青年館でのクリスマス・ページェントでダブル・カルテットの指揮
1931-2-25	アメリカン・スクール演奏会で高校合唱を指揮
1931-6-18	アメリカン・スクール卒業式で合唱を指揮
1938-8-28	野尻湖恒例の宗教的演奏会でゴール《聖なる都》を指揮
1940-11-21	感謝祭礼拝で8声の合唱 'Now Thank We All, Our God' を指揮
1950-12-24	東京ユニオン教会のクリスマス礼拝で合唱指揮
1951-12-23	東京ユニオン教会のクリスマス礼拝で合唱指揮
1952-4-12	東京ユニオン教会の復活祭礼拝で合唱指揮

フロレンスは、1916年4月10日に東京コーラル・ソサエティが行なった「ジョージ国王誕生日基金」支援のコンサート（於：本郷中央会堂）において、フェーリクス・メンデルスゾーン Felix Mendelssohn（1809～1847）作曲のオラトリオ《エリヤ Elijah》抜粋を指揮した（1916-4-11 JT）。同月24日には横浜ユニオン教会でも同曲を指揮しており、その指揮ぶりについて「この相当に複雑な合唱曲の数々を指揮して、優れた能力と大きな成果を収めた」と高く評価されている（1916-4-25 JT）。

演奏者は、ソプラノ独唱がシャフナー夫人 Mrs. Schaffner、アルト独唱がキャンベル夫人 Mrs. Campbell、テノール独唱がキネス氏 C. B. Kinnes とナガイ氏 W. Nagai とロスコー氏 N. K. Roscoe、バス独唱がコールドヘスター氏 F. S. Coldhester、合唱はソプラノ11人、アルト8人、テノール7人、バス9人の計35人、伴奏はハナフォード氏 H. D. Hannaford のオルガンと、横浜のデヴィス夫人 Mrs. E. C. Davis とソーン氏 C. H. Thorn のヴァイオリンであった。

これらの人々を音楽的に導いてまとめ上げるだけの力量をフロレンスが備えており、その力を発揮したものと考えられる。

1927年の夏には軽井沢での《メサイア》上演に当たって一ヶ月の事前リハー

サルを指揮して特記されているが、これについては別途、次節で扱う。

弘前から東京に戻った1930年のクリスマス・ページェント（於：日本青年館）では、クリスマス・キャロルを歌うダブル・カルテットのリーダーを務めた（1930-12-11 JT）。

1931年2月には子どもたちが通うアメリカン・スクールの演奏会で、高校コーラスを指揮した⁹（1931-2-25 JT）。同年6月の同校の卒業式当日にも、合唱を指揮して音楽の夕べに貢献している（1931-6-18 JT）。

1940年11月21日には東京ユニオン教会の感謝祭礼拝で、トリニティ教会とホーリー・ユニオン教会との合同合唱団を指揮して、‘Now Thank We All, Our God’の8声編曲を演奏している。オルガン伴奏は明治学院のハワード・ハナフォードであった（1940-11-21 JT）。

1950年12月24日の東京ユニオン教会のクリスマス英語礼拝（日曜日の夕方4時から青山学院礼拝堂）で、イタリアとフランス、オーストリアとラップランドのキャロルを含む伝統的なクリスマス音楽が演奏され、指揮はC. アイグルハート夫人、オルガンはハワード・ハナフォードであった（1950-12-24 JT）。

1951年12月23日の東京ユニオン教会のクリスマス礼拝では、合唱による特別なクリスマス音楽がC.W. アイグルハート夫人指揮の合唱団によって演奏され、ハワード・ハナフォード氏がオルガンで伴奏した（1951-12-23 JT）。

1952年4月12日の東京ユニオン教会の復活祭礼拝（於：教会サンクチュアリー）において、復活祭ならではの音楽がアイグルハート夫人とW. ハナフォード博士による指導で演奏されている（1952-4-12 JT）。

このようにフロレンスは、限られた東京在住時（1913～1916、1930～1941、1950～1953）の折々にタクトを振って合唱の指揮・指導を行なっている。

フロレンスが継続的に関わった東京コーラル・ソサエティには宣教師の妻や娘が合唱メンバーとして多数参加していたが、その中で指揮を担ったのはフロレンス一人であり、この点でも傑出していたことが知られる（津上 2022a,

9 アメリカン・スクールの高校コーラスが歌った曲は、ホリー Holly 作曲 ‘The Little Tin Soldier’ と黒人霊歌の ‘Nobody knows the Trouble I’ve Seen’。

96)。

合唱団の存続に必須の三要素は、「音楽を心から愛する歌手たち」と「音楽に対する燃えるような情熱と、演奏者たちに対する敬意と高い共感性とを備えた優れた指揮者」、そして「有能で揺るぎない意志を貫くことのできる献身的なビジネス・マネジャー」とされる (Krehbiel 1884, 56-57)。フロレンスが女性でありながらも「音楽に対する燃えるような情熱と、演奏者たちに対する敬意と高い共感性とを備えた優れた指揮者」たる資質を備えていたことは、彼女の限られた東京時代の折々に合唱団を指揮する機会が与えられたという事実によって裏付けられる。

6. 夏の避暑地での音楽活動：軽井沢と野尻湖

日本各地で活動する宣教師たちが夏の避暑地を集って会合や交流を持ったことはよく知られている。場所は始め軽井沢であったが、避暑地としての軽井沢の人气が高まって世俗化が顕著になると、より静かな環境を求めて野尻湖へと移る者が続出した。

チャールス・アイグルハート夫妻も、夏の滞在先を軽井沢から野尻湖に転じている。夏になると『ジャパン・タイムズ』には「軽井沢便り」や「野尻便り」といったコーナーが設けられて、誰がいつ到着してどのコテージに入ったとか、避暑地から勤務地に戻ったといった動向が報じられている。その報道によれば、チャールス・アイグルハート夫妻は少なくとも1912年から1927年までは軽井沢¹⁰、1929年から1940年までは野尻湖¹¹で夏を過ごしており、戦争のために日本を離れた1941年には野尻湖のチャールス・アイグルハート邸 (87番地) は友人一家が借用したことが知られる¹² (1941-8-12 JT)。

10 軽井沢に滞在の報道が見られるのは、1912、1913、1922、1923、1924 (滞在客あり)、1927年。

11 野尻湖に滞在の報道が見られるのは、1929 (コテージ21番)、1930、1931 (オルチン滞在)、1935、1936、1937、1938 (A. R. ゴール作曲《聖なる都》上演)、1940年。

12 *Nojiri Hand Book* (1940) の「野尻湖居住者、アルファベット順名簿 *Nojiri Residents, Alphabetical List*」に E. T. アイグルハート氏と C. W. アイグルハート夫妻は共に87

避暑先では様々な催しが行われて、普段は日本各地に散らばって活動している宣教師たちが共に多様な交流を持つ機会とされた。毎夏に軽井沢で行われた宣教師会議がその典型であるが、他に毎週火曜の演奏会やテニスの試合（軽井沢と野尻湖の対抗戦もあった）等が行われた。

その中で特記すべきは、1927年夏の軽井沢でのヘンデル《メサイア》上演と、1938年夏の野尻湖恒例の宗教的コンサートでアルフレッド・ロバート・ゴール Alfred Robert Gaul（1837～1913）作曲のオラトリオ《聖なる都 Holy City》上演が行われて、フロレンスが指揮棒を振ったことである。

6-1. 1927年夏の軽井沢の《メサイア》上演

1927年の夏には軽井沢でヘンデルのオラトリオ《メサイア》が上演された。軽井沢始まって以来の画期的な出来事で、『ジャパン・タイムズ』紙でも度々、詳しく報道されている。

まず7月26日付紙面で、8月に軽井沢でオラトリオ《メサイア》を上演する計画が持ち上がっているのので、興味のある人は7月28日夜に講堂に集まるようにと呼びかけられた。N. ロスコ夫人 Mrs. N. Roscoe、C. W. アイグルハート夫人、S. フィッシャー夫人 Mrs. S. Fischer と B. F. シャイブリー氏 Mr. B. F. Shively がこの企画を担当すると報じられている（1927-7-26 JT）。

さっそく7月30日の午後、《メサイア》の初回リハーサルがC. アイグルハート夫人の指揮、N. ロスコ夫人のピアノで行われた。歌い手は約40人で、この春、東京での公演を指揮したゲーリーが土曜日に軽井沢に来て、夜7時45分からのリハーサルを指揮する予定なので、歌い手は全員集合するように、また《メサイア》公演は8月23日の予定と告知されている（1927-7-30 JT）。

8月23日の週には講堂で大きな催しが2つあると予告されている。すなわち火曜（8月23日）夜には近衛秀麿指揮の東京シンフォニー・オーケストラの演奏会があり、その収益はすべて軽井沢老人ホームに寄付されること、また木曜

番地、ハナフォード夫妻は52番地、アウターブリッジ夫妻は30番地と記載されている。

(8月25日) 夜には《メサイア》上演があるが、いずれの催しも従来の軽井沢で行われた催しに比べて大規模なもので、定めし講堂は満席になるだろうと報じている (1927-8-23 JT)。

《メサイア》上演のソリストは、ソプラノがアウターブリッジ夫人 Mrs. Outerbridge、アルトがダンネール夫人 Mrs. Dannehl、テノールが E. T. アイグルハート氏、バスは B. F. シャイブリー氏であった (1927-8-24 JT)。

8月26日付紙面では、今春に東京でこのカンタータ [ママ] の上演を見事に指揮したゲーリー氏が軽井沢に到着して、最後のリハーサル2回を指揮することと、数週間前の事故の後遺症を抱える N. ロスコー夫人に代わって、明日の夕方はウォルブリッジ氏 Mr. Walbridge がピアノを担当することが報じられている (1927-8-26 JT)。

実際に《メサイア》の上演が行われたのは8月25日であった。「《メサイア》が講堂で熱狂的な大聴衆の前で上演され、多数が場外に立っていた Messiah Sung in Auditorium To Large And Enthusiastic Audience; Many Stand Outside」と題した25日付の報告記事が27日の紙面に掲載された。それによれば、軽井沢で初めて《メサイア》が上演され、600席の講堂は満杯で、入り切れなかった人々が雨模様の中、戸外に立って窓越しに耳を傾けたという。「今夜の上演は完全な成功で、それは合唱メンバー全員の情熱と、ゲーリー氏ならびにリハーサルを指揮してくれた C. アイグルハート夫人、そして最終リハーサルと本番のピアノ伴奏をしてくれたウォルブリッジ氏の疲れを知らない貢献のお蔭である」¹³ と讃えられている (1927-8-27 JT)。

本番の指揮は青山学院教授のゲーリーに譲ったものの、7月からの一ヶ月間の事前リハーサルを導いたのはフロレンスであり、その功績が公正に評価されたものと見られる。

13 The event tonight was a complete success, due to the enthusiasm of all in the chorus and to the untiring work of Mr. Gealy and Mrs. C. Iglehart, who conducted the rehearsals, and to Mr. Walbridge, who accompanied on the piano during the later rehearsals, as well as tonight.

6-2. 1938年夏の野尻湖の《聖なる都》上演

1938年9月3日付『ジャパン・タイムズ』紙の「野尻便り Nojiri Notes」欄において、日曜（8月28日）の夕方、「恒例の宗教的コンサートが開かれ、今年のおラトリオはゴール作曲《聖なる都》であった。これは今シーズンのハイライトの一つであり、合唱団は見事に選ばれ、演奏は実に優れたものであった。C. W. アイグルハート夫人が指揮をし、パウル夫人 Mrs. Powle がピアノで、ロバーツ氏 Mr. Roberts がオルガンで伴奏した」¹⁴ と報じられている（1938-9-3 JT）。

この記事には「恒例の宗教的コンサート」とあり、野尻湖では毎夏の宗教的コンサートが定例化していたことが知られるが、その実態は不詳である¹⁵。

このように東京を離れていた時期のフロレンスは、夏の避暑地に日本各地から宣教師たちが集う機会に、彼らの歌う場に加わり、時にオラトリオを指揮することで、自分の音楽的な力を活かしていたことが知られる。

7. 幼年時代の教育

フロレンスは1935年2月11日に東京ウィメンズ・クラブの次期会長に選出されて、『ジャパン・タイムズ』の紙面に写真入りで大きく報道された（1935-2-11 JT）。さらに翌年3月には「東京ウィメンズ・クラブの新会長が往年の大阪時代を回顧する New WC President recalls early days in Osaka」と題する記事がやはり写真入りで大きく掲載された（1936-3-16 JT）。

この回顧記事の中でフロレンスは、大阪における自分の幼年時代を振り返っ

14 In the evening the annual Sacred Concert was given, this year's Oratorio being Gaul's "Holy City." This was one of the high lights of the season, the choir being admirably chosen and rendering the music in a truly masterly way. Mrs. C. W. Iglehart conducted with Mrs. Powle at the piano and Mr. Roberts at the organ.

15 1933年9月1日にも野尻湖畔で「恒例の宗教的コンサート」が開かれたと報じられているが、この時は大曲ではなく複数の多様な小品の演奏が行われた（1933-9-1 JT）。

て、当時の日本には現在のような外国人のための学校¹⁶はなかったので、フロレンスも周りの外国人の子どもたちも専ら家庭で母親による教育を受けたこと、母親たちは協力してしばしば教える科目や生徒たちを交換したこと、フロレンスも自分の子どもたちが小さい時には同様に家庭内で教えたことを語っている。

この記事ではフロレンスが、日本でもアメリカでも「日本における教会音楽の父 father of church music in Japan」として知られている故ジョージ・オルチン George Allchin (1852~1935) 師の娘として大阪で生まれたことと、東京ウィメンズ・クラブの指導者の中では日本で生まれた数少ない一人であることが報じられている。オルチンについては、讃美歌編纂や讃美歌集の収集、幻燈を活用した伝道やトニック・ソルファ譜による音楽教育等がよく知られて研究も多いが、オルチン家の家庭教育がどのようなものであったかに踏み込んだ研究は残念ながら見当たらない。

だが、幼年期の家庭教育に関しては、フロレンスの5歳年上に当たるシャーロット・デフォレスト Charlotte Burgis De Forest (1879~1973) の例が参考になる。シャーロットもアメリカン・ボードの宣教師ジョン・ハイド・デフォレスト John Hyde De Forest (1844~1911) の次女として大阪の川口居留地で生まれており、フロレンスと似通った生い立ちを持っている。シャーロットは成長期を仙台で過ごしたが、その間、母親が教科書を取り寄せて家庭で勉強させた(竹中 2003、25)。

デフォレスト家では、「宗教教育としては、毎朝家族がそろって、家族礼拝があり、聖書を読み、祈りをし、讃美歌が歌われた。これらは父から子に、そして子から孫へと伝えられて来たピューリタンたちの心の習慣 (Habit of the Hearts) であった」、「ときにはそれぞれ楽器を奏でて家族で讃美歌を歌うこともあった」と伝えられる(竹中 2003、26)。

ジョン・デフォレストよりもさらに音楽的に大きな存在として知られる

16 神戸のカナディアン・スクールや東京のアメリカン・スクールを指す。

ジョージ・オルチンのこと、デフォレスト家に勝るとも劣らない豊かな音楽生活が日々の家庭で営まれていたと考えるのが自然である。そうした環境で育まれた音楽的な力が、フロレンスのニュー・イングランド音楽院への進学や、後年の歌唱や指揮活動の下地として大きな支えとなったものと推測される。

1931年8月には父ジョージ・オルチンとヘレン・オルチン Miss Helen Allchin が野尻湖の C. W. アイグルハート邸に滞在して、フロレンスが2人をもてなしたことが報じられている（1931-8-4 JT）。オルチンは翌1932年1月22日に横浜港から秩父丸で帰米しており（1932-1-22 JT）、半年弱の日本滞在の間に、娘フロレンスの舞台での活躍（バッハ《クリスマス・オラトリオ》のソプラノ独唱）に接したものと考えられる。

8. 叙勲

チャールス・アイグルハート夫妻は最終的に1953年7月13日に帰米したが、離日直前に夫妻揃って叙勲を受けている（1953-7-12 JT）。正確には兄エドウィン・アイグルハートと3人で叙勲された。叙勲の功績調査¹⁷には各時期のフロレンスの業績が詳細に記されて、教育活動と社会福祉活動とが特記されている。調査は「以上のように同人は多年わが国学校教育ならびに社会事業に力を尽し、多大の貢献をなしたもので、その功績は誠に顕著なものと認めらる」と締め括られている。

エドウィンの妻ルエラは叙勲されておらず、宣教師で青山学院の教授でもあったチャールスとエドウィンの2人と並んでフロレンスが叙勲されたという事実は、フロレンスの存在と活動が宣教師夫人として如何に抜きん出たものであったかを雄弁に語ってくれる。

17 国立公文書館の請求資料「平1 総00386100「簿冊叙勲・外国人1・巻20・昭和28年」[件名番号：010] 米国人チャールス・ホイラー・アイグルハート外2名勲章贈与の件。

9. 結論

本稿の目的は、宣教師夫人の音楽活動をフロレンス・アイグルハート(1884～1958)の事例に即して明らかにすることであった。フロレンスはメソジスト監督派教会宣教師 C. W. アイグルハート夫人として3人の娘を産み育て、社会事業に尽力しながら、折々に音楽家として活躍したことが、既述のように『ジャパン・タイムズ』掲載記事から読み取られた。

歌い手としては、合唱や重唱の他、1930年12月のヘンデル《メサイア》に加えて、1931年3月のブラームス《レクイエム》、1931年12月のバッハ《クリスマス・オラトリオ》各2公演でソプラノ独唱者を務めた。

指揮者としては、1916年4月にメンデルスゾーン《エリヤ》抜粋を東京と横浜の2公演で指揮し、1927年夏の軽井沢での《メサイア》公演では一ヶ月の事前リハーサルを指揮して、いずれもその貢献が特記された。1930年代にはアメリカン・スクールの合唱団を指揮し、東京ユニオン教会では1940年の感謝祭礼拝、1950年と翌年のクリスマス礼拝、1952年の復活祭礼拝で合唱を指揮した。

社会・教育事業への貢献により1953年に夫妻揃って叙勲されており、フロレンスが宣教師夫人として際立った存在であったことが知られる。

以上から、宣教師夫人としてのフロレンスの卓越性が浮き彫りになってきたが、東京以外の地方での活動については未詳の部分が多く残っている。

例えば、1927年12月24日付の紙面では、京都のシャイブリー夫妻が弘前を訪問してアイグルハート家に滞在し、クリスマス休暇中にアイグルハート夫妻と4人で秋田県と青森県の町々で一連の演奏会をすると報道されている(1927-12-24 JT)。

また上記の叙勲の功績調査では、弘前市の東奥義塾を拠点に優れた音楽教育を展開して、「正規の指導の外に音楽クラブを組織して訓育に努めて著しい成果をあげ、その感化を受けた者の中から幾多の音楽専門家を輩出し、現在の同塾音楽教師を始めとしてその他の学校にも多数の教師を輩出せしめている」と評価されているが、こうした東北各地での活動については今後の調査に委ねる

他ない。

宣教師夫人については、一般に次のように語られる（齋藤 2009b, 36-37）。

宣教師の妻は、異国で夫を支え、子どもを育てながら、クリスチャン・ホームを維持してゆくことに大半のエネルギーを消費され、自ら女性への伝道活動に乗り出して行くゆとりはほとんどなかった。なかには強い使命感から伝道を試みる者もいたが、健康を害する結果となり、伝道地からの報告書に宣教師の妻の名前が載る場合は、そのほとんどが彼女の死を告げる時であると言われたほどである。

時代の進展と共に宣教地における宣教師家族ならびに宣教師夫人の生活も改善が進んだものと推察されるが、宣教師夫人としての通常の活動に加えて、多彩な歌唱や指揮活動を展開したフロレンスの例は、正に傑出したケースであったと言って間違いないであろう。

そうした顕著な活動を支えた音楽的な力の拠り所として、父ジョージ・オルチンに率いられた幼年時代の家庭教育で日々、身につけた堅固な基礎力の上に、ニュー・イングランド音楽院での専門教育によって磨かれた歌唱ならびに合唱指揮の実力が花開いたものと考えられる。

引用文献

- 克蘭メル, ジャン・W. (編) 1996『来日メソジスト宣教師事典』東京：教文館
- 齋藤元子 2009a「メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献」『ウェスレー・メソジスト研究』10, 85-97.
- 齋藤元子 2009b『女性宣教師の日本探訪—明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』東京：新教出版社
- 武内博（編著）1995『来日西洋人名事典 増補改訂』東京：日外アソシエーツ
- 竹中正夫 2003『C. B. デフォレストの生涯 美と愛の探求』大阪：創元社
- 津上智実 2022a「本邦最初期の《メサイア》演奏を担った女性たち」神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』36, 111-127.

津上智実 2022b 「歌の系譜：戦前の東京コーラル・ソサエティ」『神戸女学院大学論集』
69-2, 91-107.

日本キリスト教歴史大事典編集委員会（編） 1988 『日本キリスト教歴史大事典』 東京：
教文館

Krehbiel, Henry Edward 1884 R/1970. *Notes on the Cultivation of Choral Music and the
Oratorio Society of New York*, New York: AMS Press.

Nojiri Lake Association 1940 *Nojiri Hand Book*.